

校異源氏物語・玉かつら

年月へたゝりぬれとあかさりしゆふかほを露わすれ給はす心くくなる人のあり
さまともをみ給ひかさぬるにつけてもあらましかはとあはれにくちおしくのみ
おほしいつ右近はなにの人かすならねとなをそのかたみとみ給てらうたきもの
におほしたれはふる人のかすにつかふまつりなれたりすまの御うつろひのほと
にたいのうへの御方にみな人くきこえわたし給しほとよりそなたにさふらふ
こゝろよくかいひそめたる物にをむな君もおほしたれと心のうちにはこきみも
のし給はましかはあかしの御方はかりのおほえにはおとりたまはさらましさし
もふかき御心さしなかりけるをたにおとしあふさすとりしたゝめ給ふ御心なか
さなりければまいてや事なきつらにこそあらさるめこの御とのうつりのかすの
うちにはましらひ給なましと思ふにあかすかなしくなむ思ひけるかのにしの京
にとまりしわか君をたにゆくゑもしらすひとへにものを思つゝみまたいまさら
にかひなき事によりて我名もらすなとくちかため給しをはゝかりきこえてたつ
ねてもをとつれきこえさりしほとにその御めのとおとこ少式になりていきけ
れはくたりにけりかのわかきみのよつになるとしそつくしへはいきけるはゝ君
の御ゆくゑをしらむとよろつの神ほとけに申てよるひるなきこひてさるへき所
ゝをたつねきこえけれとつるにえきゝいてすさらはいかゝはせむ若君をたにこ
そは御かたみにみたてまつらめあやしきみちにそへたてまつりてはるかなるほ
とにおはせむ事のかなしきことなをちゝ君にほめかさむと思けれとさるへき
たよりもなきうちにはゝ君のおはしけむかたもしらすたつねとひ給はゝいかゝ
きこえむまたよくもみなれ給はぬにおさなき人をとゝめたてまつり給はむもう
しろめたかるへししりなからはたいてくたりねとゆるし給へきにもあらすなど
をのかしゝかたらひあはせていとうつくしうたゝいまからけたかくきよらなる
御さまをことなるしつらひなき舟にのせてこきいつるほとはいとあはれになむ
おほえけるおさなき心ちにはゝ君をわすれすおりくにはゝの御もとへゆくか
ととひ給につけて涙たゆるときなくむすめともゝ思こかるゝをふなみちゆゝし
とかつはいさめけりおもしろきところくをみつゝ心わかうおはせし物をかゝ
るみちをもみせたてまつる物にもかなおはせましかはわれらはくたらさらまし

と京のかたを思やらるゝにかへるなみもうらやましく心ほそきにふなことの
あら／＼しきこゑにてうらかなしくもとをくきにけるかなとうたふをきくま
まにふたりさしむかひてなきけり

ふな人もたれをこふとかおほしまのうらかなしけにこゑのきこゆる

こしかたもゆくゑもしらぬおきにいてゝあはれいつくに君をこふらんひな

のわかれにをのかしゝ心をやりていひけるかねのみさきすきてわれはわすれ
すなどよゝものことくさになりてかしこにいたりつきてはまいてはるかなる
ほとを思ひやりてこひなきてこの君をかしつきものにてあかしくらすゆめな
とにとたまさかにみえ給ときなともありおなしさまなる女なとそひ給ふて
みえ給へはなこり心ちあしくなやみなとしければ猶よになくなり給にける
なめりと思ひなるもいみしくのみなむせうににむはてゝのほりなとするに
はるけきほとにことなるいきをいなき人はたゆたいつゝすか／＼しくも
いてたゝぬほとにをもきやまひしてしなむとする心ちにもこの君の十は
かりにもなり給へるさまのゆゝしきまておかしけなるをみたてまつりて
我さへうちすてたてまつりていかなるさまにはふれ給はむとすらんあや
しき所におひいて給もかたしけなく思きこゆれといつしかも京にいて
たてまつりてさるへき人にもしらせたてまつりて御すくせにまかせて
みたてまつらむにもみやこはひろき所なれはいと心やすかるへしと思
いそきつるをこゝなから命たへすなりぬる事とうしろめたかるおのこ
ゝ三人あるにたゝこの姫君京にいてたてまつるへき事を思へ我みのけ
ふをはな思ひそとなむいひをきけるその人の御ことはたちの人にもし
らせすたゝむまこのかしつくへきゆへあるとそいひなしければ人に
みせずさきりなくかしつききこゆるほとに俄にうせぬればあはれに
心ほそくてたゝ京のいてたちをすれこの少弐の中あしかりける国
の人おほくなとしてとさまかうさまにおちはゝかりて我にもあら
てとしをすすすにこの君ねひとゝのひ給まゝにはゝ君よりもまさ
りてきよらにちゝおとゝのすちさへくはゝれはにやしたかくうつくし
けなり心はせおほとかにあらまほしうものし給きゝついつゝすいたる
ゑ中人とも心かけせうそくかるとおほかりゆゝしくめさましくおほ
ゆれはたれも／＼きゝいれすかたちなどはさてもありぬへけれとい
みしきかたわのあれは人にもみせてあまになして我よのかきりはも
たらむといひちらしたれはこ少弐のむまこはかたわなむあんなる
あたらのものをといふなるをきくもゆゝしくいかさまにして宮こに
いてたてまつりてちゝおとゝにしらせたてまつらむいときなきほ
とをいらうたしと思きこえ給へりしかはさりともおろかには思すて
きこえ給はしなと

いひなけくほと仏神に願をたて、なむ念しけるむすめとも、おのことも、ところにつけたるよすかともいてきてすみつきにたり心のうちにこそいそき思へと京の事はいやとをさかるやうにへた、りゆくものおほし、るま、によをいとうきものにおほして年三などし給甘はかりになり給ま、におひと、のほりていとあたらしくめてたしこのすむ所はひせむの国とそいひけるそのわたりにもいさ、かよしある人はまつこのせうにのむまこのありさまをき、つたへて猶たえすをとつれくるもいといみしうみ、かしこましまてなむ大夫監とてひこのくに、そうひろくてかしこにつけてはおほえありいきをひいかめしきつはものありけりむくつけき心の中にいさ、かすきたる心ましりてかたちある女をあつめてみむと思けるこのひめ君を聞つけていみしきかたわありとも我はみかくしてもたらむといとねむころにいひか、るをいとむくつけくおもひていかてか、る事をきかてあまになりなむとすといはせたりけはいよくあやうかりてをしてこのくに、こえきぬこのをのこともをよひとりてかたらふ事は思ふさまになりなはおなし心にいきをひをかはすへき事なとかたらふにふたりはおもむきにけりしはしこそにけなくあはれと思ひきこえけれをのく我みのよるへとたのまむにいとたのもしき人なりこれにあしくせられてはこのちかきせかいにはめくらひなむやよき人の御すちといふともおやにかすまへられたてまつらすよにしてはなにのかひかはあらむこの人のかくねむころに思きこえ給へるこそいまは御さいはゐなれさるへきにてこそはか、るせかいにもおはしけめにけかくれ給ともなにのたけき事はあらむまけたましゐにいかりなはせぬ事ともしてんといひをとせはいといみしとき、てなかのこのかみなるふこのすけなむ猶いとたいくしくあたらしき事なりこせうにの給し事もありとかくかまへて京にあけたてまつりてんといふむすめとも、なきまとひては、君のかひなくてさすらへ給ひてゆくゑをたにしらぬかはりに人なみくにてみたてまつらむこそ思にさる物の中にましり給なむ事とおもひなけくをもしらて我はいとおほえたかきみと思てふみなどかきておこすてなときたなけなうかきてからのしきしかうはしきかうにいれしめつ、おかしくかきたりと思たることはそいとたみたりけるみつからもこのいゑのしらうをかたらひとりてうちつれてきたり三十はかりなるをのこのたけたかくものくしくふとりてきたなけなれと思なしうとましくあら、かなるふるまひなどみるもゆ、しくおほゆいろあひ心ちよけにこゑいたうかれてさへつりるたりけさう人はよにかくれたるをこそよはひとはいひけれさまかへたる春の夕暮なり秋ならねともあやしかりけりとみゆ心をや

ふらしとてをはおとゝいてあふこせうにのいなさけひきらしくものし給しをいかてかあひかたらひ申さむと思給しかともさる心さしをもみせきこえす侍りしほとにいとかなしくてかくれ給にしをそのかはりにいかうにつかふまつるへくなむ心さしをはけましてけふはいとひたふるにしゐてさふらひつるこのおはしますらむ女君すちことにうけ給れはいとかたしけなしたゝなにかしらかわたくしの君と思申でいたゝきになむさゝけたてまつるへきおとゝもしふくにおはしけなる事はよからぬをむなともあまたあひしりてはへるをきこしめしうとむなゝりさりともしやつはらをひとなみにはし侍なむや我君をはきさきのくらゐにおとしたてまつらしものをやなといとよけにいひつゝくいかゝはかくの給をいときいわひありと思給ふるをすくせつたなき人にや侍らむ思はゝかる事侍でいかてか人に御らむせられむと人しれすなけき侍めれは心くるしうみ給へわつらひぬるといふさらになおほしはゝかりそ天下にめつふれあしおれ給へりともなにかしはつかふまつりやめてむくにのうちの仏神はをのれになむなひき給へるなとほこりゐたりそのひはかりといふにこの月はきのはてなりなとゐ中ひたる事をいひのかるおりていくきはにうたよまゝほしかりければやゝひさしう思めくらしして

君にもし心たかはゝまつらなるかゝみの神をかけてちかはむこの和歌はつ

かうまつりたりとなむ思ひ給るとうちゑみたるもよつかすうゑくしやあれにもあらねは返しすへくも思はねとむすめともによますれとまろはましてものもおほえずとてゐたれはいとひさしきに思わひてうち思けるまゝに

としをへていのる心のかひなはかゝみの神をつらしとやみむとわなゝか

しいてたるをまでやこはいかにおほせらるゝとゆくりかによりきたるけはひにおひへておとゝいもなくなりぬむすめたちはいへと心つよくわらひてこの人のさまことにものし給をひきたかへいつらは思はれむを猶ほけくしき人のかみかけてきこえひかめ給なめりやととききかすをいさりくどうなつきておかしき御くちつきかなゝにかしらゐ中ひたりといふなこそ侍れくちおしきたみには侍らす宮この人とてもなにはかりかあらむみなしりて侍りなおほしあなつりそとてまたよまむと思へれともたへすやありけむいぬめりしらうかかたらひとられたるもいとおそろしく心うくてこのふむこのすけをせむれはいかゝはつかまつるへからむかたらひあはすへき人もなしまれまれのはからはこのけむにおなし心ならずとて中たかひにたりこのけむにあたまれてはいさゝかのみしるきせむも所せくなむあるへき中くゝなるめをやみむとおもひわつらひにたれ

とひめ君の人しれすおほいたるさまのいと心くるしくていきたらしと思しつみ
給へることはりとおほゆれはいみしき事を思かまへていてたついもうとたちも
としころへぬるよるへをすてゝこの御ともにいてたつあてきといひしはいまは
兵部の君といふそそひてよるにけいてゝ舟にのりける大夫のけむはひこにかへ
りいきて四月廿日のほどにひとりてこむとするほどにかくてにくるなりけりあ
ねのおもとはるいひろくなりてえいてたゝすかたみにわかれおしみてあひみむ
事のかたきを思にとしへつるふるさとゝてことにみすてかたき事もなしたゝま
つらの宮のまへのなきさとかのあねおもとのわかるゝをなむかへりみせられて
かなしかりける

うき島をこきはなれてもゆくかたやいつくとまりとしらすもあるかな

ゆくさきもみえぬ浪路にふなてして風にまかするみこそうきたれいとあと

はかなき心ちしてうつふしゝ給へりかくにけぬるよしをのつからいひいてつ
たへはまけたましゐにてをひきなむと思に心もまとひてはや舟といひてさま
ことになむかまへたりければ思かたの風さへすゝみてあやうきまではしりのほ
りぬひきのなたもなたらかにすきぬかいそくの舟にやあらんちいさき舟のと
ふやうにてくるなといふものありかいそくのひたふるならむよりもかのおそろ
しき人のをひくるにやと思ふにせむかたなし

うきことにむねのみさはくひゝきにはひゝきのなたもさはらさりけりかは

しりといふところちかつきぬといふにそすこしいき出る心ちする例のふなこと
もからとまりよりかはしりをすほとはとうたふこゑのなさけなきもあはれにき
こゆふむこのすけあはれになつかしううたひすさみていとかなしきめこもわす
れぬとて思はけにそみなうちすてゝけるいかゝなりぬらんはかゝしく身のた
すけと思らうとうともはみないてきにけり我をあしとおもひてをひまとはして
いかゝしなすらんと思にこゝろをさなくもかへりみせていてにけるかなとすこ
し心のとまりてそあさましき事を思つゝくるに心よはくうちなかれぬ胡の地の
せいしをはむなしくすてゝつとすするを兵部の君きゝてけにあやしのわさや
としころしたかひきつる人の心にも俄にたかひてにけいてにしをいかに思らん
とさまゝ思つゝけらるゝかへるかたとでもそこところといきつくへきふるさ
ともなししれる人といひよるへきたのもしき人もおほえすたゝひと所の御ため
によりこゝらのとし月すみなれつるせかいをはなれてうかへる浪風にたゝよひ
て思めくらすかたなしこの人をもいかにしたてまつらむとするそとあきれてお
ほゆれといかゝはせむとていそき入ぬ九条にむかししれりける人のゝこりたり

けるをとふらひいて、そのやとりをしめをきて宮このうちといへとはかはかし
き人のすみたるわたりにもあらずあやしき市女あき人の中にいふせく世の中
をおもひつゝ秋にもなりゆくまゝにきしかたゆくさきかなしき事おほかり豊後
のすけといふたのもし人もたゝ水鳥のくかにまとへる心ちしてつれ／＼になら
はぬありさまのたつきなきを思にかへらむにもはしたなく心をさなくいてたち
にけるを思ふにしたかひきたりし物ともゝるいにふれてにけさりもとのくにゝ
かへりちりぬすみつくへきやうもなきをはゝおとゝあけくれなきいとをし
かはなにかこの身はいとやすく侍り人ひとりの御身にかへたてまつりていつち
も／＼まかりうせなむにとかあるましわれらいみしきいきをひになりてもわか
君をさる物の中にはふらしたてまつりてはなに心ちかせましとかたらひなくさ
めて神仏こそはさるへきかたにもみちひきしらせたてまつり給はめちかきほと
にやはたの宮と申はかしこにてもまいりいのり申給しまつらはこさきおなしや
しろなりかのくにをはなれ給とてもおほくの願たて申給きいま都にかへりてか
くなむ御しるしをえてまかりのほりたるとはやく申給へとてやはたにまうてさ
せたてまつるそのわたりしれる人にいひたつねてこしとてはやくおやのかた
らひし大とくのこれをよひとりてまうてさせたてまつるうちつきては仏の御
中にははつせなむひのものとうちにはあらたなるしるしあらはし給ともろこし
にたにきこえあむなりましてわかくにのうちにこそとをきくにのさかひとても
としへ給えればわかきみをはましてめくみ給てんとていたしたてまつる殊
更にかちよりとさためたりならはぬ心ちにいとわひしくゝるしけれと人のいふ
まゝにものもおほえてあゆみ給いかなるつみふかき身にてかゝるよにさすらふ
らむわかおやよになくなり給へりとも我をあはれとおほさはおはすらむ所にさ
そひ給へもし世におはせは御かほみせ給へと仏をねんしつゝありけむさまをた
におほえねはたゝおやおはせましかはとはかりのかなしさをなけきわたり給へ
るにかくさしあたりて身のわりなきままにとりかへしいみしく覺つゝからうし
てつはいちといふ所に四日といふみのときはかりにいける心ちもせていきつき
給へりあゆむともなくとかくつくろひたれとあしのうらうこかれすわひしけれ
はせんかたなくてやすみ給このたのもし人なるすけゆみやもちたる人ふたりさ
てはしもなる物わらはなと三四人をんなはらあるかきり三人つほさうそくして
ひすましめくものふるきけす女ふたりはかりとそあるいとかすかにしのひたり
おほみあかしのことなとこゝにてしくはへなとするほどにひくれぬいゑあるし
のほうし人やとしたてまつらむとする所になに人のものし給そあやしき女とも

の心にまかせてとむつかるをめさましくきくほとにけに人々きぬこれもかちよ
りなめりよろしき女ふたりしも人ともそおとこ女かすおほかむめるむま四五ひ
かせていみしくしのひやつしたれときよけなるおとこともなとありほうしはせ
めてこゝにやとさまほしくしてかしらかきありくいとおしけれとまたやとりか
へむもさまあしくわつらはしければ人々はおくに入りほかにかくしなとしてか
たへはかたつかたによりぬせ上などひきへたてゝおはしますこのくる人もはつ
かしけもなしいたうかいひそめてかたみに心つかひしたりさるはかのよとゝも
にこひなく右近なりけりとし月にそへてはしたなきましらひのつきなくなり行
身を思ひなやみてこのみ寺になむたひくまうてける例ならひにければかやす
くかまへたりけれとかちよりあゆみたへかたくてよりふしたるにこのふんこの
すけとなりのせ上のもとによりきてまいり物なるへしおしきてつからとりてこ
れは御まへにまいらせ給へ御たいなとうちあはていとかたはらいたしやといふ
を聞に我なみの人にはあらしと思て物ゝはさまよりのそけはこのおとこのかほ
みし心ちすたれとはえおほえすいとわかゝりしほとをみしにふとりくろみてや
つれたれはおほくのとしへたてたるめにはふとしもみわかぬなりけり三条ここ
にめすとよひよする女をみれば又みし人なりこ御方にしも人なれとひさしくつ
かふまつりなれてかのかくれ給へりし御すみかまでありし物なりけりとみなし
ていみしく夢のやうなりしうとおほしき人はいとゆかしけれとみゆへくもかま
へす思わひてこの女にとはむ兵藤たといひし人もこれにこそあらめ姫君のおは
するにやと思よるにいと心もとなくてこのなかへたてなる三条をよはすれとく
ひ物に心いれてとみにもこぬいにくしとおほゆるもうちつけなりやからうし
ておほえすこそ侍れつくしのくにゝはたとせはかりへにけるけすの身をしらせ
給へき京人よひとたかへにや侍らむとてよりきたりゐ中ひたるかいねりにきぬ
なときていといたうふとりにけり我かよはひもいとゝおほえてはつかしけれと
なをさしのそけわれをはみしりたりやとてかほさしいてたりこの女のをうち
てあかおもとにこそおはしますしけれあなうれしともうれしいつくよりまいり給
たるそうへはおはしますやといとおとろくしくなくわかき物にてみなれしよ
を思ひ出るにへたてきにけるとし月かそへられていとあはれなりまつおとゝは
おはすや若君はいかゝなり給にしあてきときこえしはとて君の御事はいひいて
すみなおはしますひめ君もおとなになりておはしますまつおとゝにかくなむと
きこえむとて入ぬみなおとろきて夢の心ちもする哉いとつらくいはむかたなく
思きこゆるひとにたいめしぬへき事よとてこのへたてによりきたりけとをくへ

たてつるひやうふたつものなこりなくをしあけてまついひやるへきかたなくな
きかはすおひ人はたゝわか君はいかゝなり給にしこゝらのところ夢にてもお
はしまさむ所をみむと大願をたつれとはるかなるせかいにて風のをとにてもえ
きゝつたへたてまつらぬをいみしくかなしと思におひの身ののこりとゝまりた
るもいと心うけれとうちすてたてまつり給へる若君のらうたくあはれにておは
しますをよみちのほたしにもてわつらひきこえてなむまたゝき侍といひつゝく
れは昔そのおりいふかひなかりし事よりもいらへむかたなくわつらはしと思へ
ともいてやきこえてもかひなし御かたはゝやうせ給にきといふまゝに二三人な
からむせかへりいとむつかしくせきかねたりひくれぬといそきたちて御あかし
の事ともしたゝめはてゝいそかせは中ゝいと心あはたゝしくてたちわかるも
ろともにやといへとかたみにともの人をあやしと思へければこのすけにもこと
のさまたにいひしらせあへす我も人もことにはつかしくはあらてみなをりたち
ぬ右近は人しれすめとゝめてみるになかにうつくしけなるうしろてのいといた
うやつれてう月のひとへめくものにきこめ給へるかみのすきかけいとあたらし
くめてたくみゆ心くるしうかなしとみたてまつるすこしあしなれたる人はとく
みたうにつきにけりこの君をもてわつらひきこえつゝ初夜をこなふほどにその
ほり給へるいとさはかく人まうてこみてのゝしる右近かつほねは仏のみきの
かたにちかきまにしたりこの御しはまたふかゝらねはにやにしのまにとをかり
けるをなをこゝにおはしませとたつねかはしいひたれはおとこともをはとゝめ
てすけにかうゝといひあはせてこなたにうつしたてまつるかくあやしき身な
れとたゝいまのおほとのになむさふらひ侍れはかくかすかなるみちにてもらう
かはしき事は侍らしとたのみ侍る中ひたる人をはかやうの所にはよからぬなま
ものどものあなつらはしうするもかたしけなき事なりとて物かたりいとせまほ
しけれとおとろゝしきをこなひのまきれさはかしきにもよほされて仏をかみ
たてまつる右近は心のうちにこの人をいかてたつねきこえむと申はたりつるに
かつゝかくてみたてまつれはいまは思のことおとゝの君のたつねたてまつら
むの御心さしふかゝめるにしらせたてまつりてさいわひあらせたてまつり給へ
なと申けりくにゝよりあ中人おほくまうてたりけりこのくにのかみのきたの
かたもまうてたりけりいかめしくいきをひたるをうらやみてこの三条かいふや
う大ひさにはことゝも申さしあか姫君たいにのきたのかたならすはたうこく
の受領のきたのかたになしたてまつらむ三条らもすいふんにさかへてかへり申
はつかうまつらむとひたいにてをあてゝねむしいりてをり右近いとゆゝしくも

いふかなと聞いていたくこそ中ひにけれな中将殿は昔の御おほえたにいかゝおはしましゝましていまはあめのしたを御心にかけ給へる大臣にていかばかりいつかしき御中に御方しも受領のめにてしなきたまりておはしまさむよといへはあなかまたまへ大臣たちもしはしまて大貳のみたちのうへのしみの御寺観世音寺にまいり給しいきおひはみかとのみゆきにやおとれるあなむくつたとてなをさらに手をひきはなたすおかみ入てをりつくし人は三日こもらむと心さし給へり右近はさしも思はさりけれとかゝるついでのとかにきこえむとてこもるへきよし大とこよひていふ御あかし文とかきたる心はへなとさやうの人はくたくしうわきまへければつねのことにて例のふちはらのるきみといふか御ためにたてまつるよくいのり申給へその人このころなむみたてまつりいてたるそのくわんもはたしたてまつるへしといふをきくもあはれなり法師いとかしき事かなたゆみなくいのり申侍るしにこそ侍れといふいとさはかしうよ一夜をこなふなりあけぬれはしれる大とこのほうにおりぬものかたり心やすくとなるへし姫君のいたくやつれ給へるはつかしけにおほしたるさまいとめてたくみゆおほえぬたかきましらひをしておほくの人をなむみあつむれと殿のうへの御かたちになる人おはせしとなむとしころみたてまつるをまたおひいて給姫君の御さまいとことはりにめてたくおはしますかしつきたてまつり給さまもならひなかめるにかうやつれ給へる御さまのおとり給ましくみえ給はありかたうなむおとゝの君ちゝみかとの御時よりそらの女御きさきそれよりしもはのこるなくみたてまつりあつめ給へる御めにもたうたいの御はゝきさきときこえしとこの姫君の御かたちとなむよき人とはこれをいふにやあらむとおほゆるときこえ給みたてまつりならふるにかのきさきの宮をはしりきこえす姫君はきよらにおはしませとまたかたなりにておひさきそをしはかられ給うへの御かたちはなをたれかならひ給はむとなむみ給殿もすくれたりとおほしためるをことにいてゝはなにかはかすへのうちにはきこえ給はむ我にならひ給へるこそ君はおほけなければとなむたはふれきこえ給みたてまつるにいのちのふる御ありさまともをまたさるたくひおはしましなむやとなむ思侍にいつくかおとり給はむ物はかきりある物なれはすくれ給へりとしてゝきをはなれたるひかりやおはするたゝこれをすくれたりとはきこゆへきなめりかしとうちゑみてみたてまつれはおひ人もうれしと思ふかゝる御さまをほとゝあやしき所にしつめたてまつりぬへかりしにあたらしくかなしうていゑかまとをもすておとこをんなのたのむへきことにもひきわかれてなむかへりてしらぬよの心ちする京にまうて

こしあかおもとはやくよきさまにみちひき、こえ給へたかき宮つかへし給人は
をのつからゆきましりたるたよりのし給らむち、おと、にきこしめされかす
まへられ給へきたはかりおほしかまへよといふはつかしうおほいてうしろむき
給へりいてや身こそかすならねと殿も御まへちかくめしつかひ給へはもの、お
りことにいかにならせ給にけんときこえいつるをきこしめしをきてわれいかて
たつねきこえむと思をき、いてたてまつりたらはとなむの給はするといへはお
と、の君はめてたくおはしますともさるやむ事なきめともおはしますなりまつ
まことのおやとおはするおと、にをしらせてまつり給へなといふにありしき
まなとかたりいて、よにわすれかたくなしき事になむおほしてかの御かはり
にみたてまつらむこもすくなきかさう／＼しきに我子をたつねいてたると人に
はしらせてとそのかみよりの給なり心のおさなかりける事はよろつにものつ、
ましかりしほとにてえたつねてもきこえてすこし、ほとにせうに、なり給へる
よしは御なにてしりにきまかり申しにとのにまいり給えりしひほのみたてまつ
りしかともえきこえてやみにきさりともし姫君をはかのありしゆふかほの五条に
そと、めたてまつり給へらむと思ひしあないみしやゐ中人にておはしますさま
しよなとうちかたらひつ、ひひといむかしものかたりねむすなどしつ、まいり
つとふ人のありさまともみくたさる、かたなりまへより行水をは、つせ川とい
ふなりけり右近

二もとの杉のたちとをたつねすはふる河のへに君をみましやうれしきせに

もときこゆ

はつせ河はやくの事はしらねともけふのあふ瀬に身さへなかれぬとうちな
きておはするさまいとめやすしかたちはいとかくめてたくきよけなからゐ中ひ
こち／＼しうおはせましかはいかにたまのきすならましいてあはれいかてかく
おひいて給けむとおと、をうれしく思は、君はた、いとわかやかにおほとかに
てやは／＼とそたをやき給へりしこれはけたかくもてなしなとはつかしけによ
しめき給へりつくしを心にく、思なすにみなみし人はさとひにたるに心えかた
くなむくるれは御たうにのほりてまたの日もをこなひくらし給秋風たによりは
るかに吹のほりていとたさむきにもいとはれなる心ともにはよろつ思つ
、けられて人なみ／＼ならむ事もありかたきこと、おもひしつみつるをこの人
のものがたりのつゐてにち、おと、の御ありさまはら／＼のなにともあるまし
き御こともみな物めかしなしたて給をきけはか、るしたくさたのもしくそおほ
しなりぬるいつとてもかたみにやとる所もとひかはしてもしまたをひまとはし

たらむときとあやうく思けり右近家は六条の院ちかきわたりなりければほと
遠からていひかはすもたつきいてきぬる心ちしけり右近はおほとのにまいりぬ
この事をかすめきこゆるついてもやとていそくなりけり御かとひきいるゝより
けはひことにひろくとしてまかてまいりする車おほくまよふかすならてたち
いつるもまはゆき心ちするたまのうてなゝりその夜は御前にもまいらて思ひふ
したりまたのひよへさとよりまいれる上臘わか人ものなかにとりわきて右近
をめしいつれはおもたゝしくおほゆおとゝも御覽してなとかさとゐはひさしく
しつるそ例ならずやまめ人のひきたかへこまかへるやうもありかしおかしき事
などありつらむかしなと例のむつかしうたはふれ事などの給まかてゝ七日にす
き侍ぬれとおかしき事は侍かたくなむ山ふみし侍てあはれなる人をなむみ給へ
つけたりしなに人そとゝひ給ふふときこえいてんも又うへにきかせてまつら
てとりわき申たらんをのちに聞給うてはへたてきこえけりとやおほさむなと思
みたれていまきこえさせ侍らむとて人くゝまいれはきこえさしつおほとなふら
なとまいりてうちとけならひおはします御ありさまともいとみるかひおほかり
をむな君は廿七八にはなり給ぬらんかしさかりにきよらにねひまさり給へりす
こしほとへてみたてまつるはまたこのほとにこそにほひくはゝり給にけれとみ
え給かの人をいとめてたしおとらしとみたてまつりしかと思なしにや猶こよな
きにさいわひのなきとあるとはへたてあるへきわさかなとみあはせらるおほと
のこもるとて右近を御あしまいりにめすわかき人はくるしとてむつかるめり猶
としへぬるとちこそ心かはしてむつひよかりけれとの給へは人くゝしのひてわ
らふさりやたれかそのつかひならひ給はむをはむつからんうるさきたはふれ事
いひかゝり給をわつらはしきになといひあへりうへもとしへぬるとちうちとけ
すきはたむつかり給はんとやさるましき心とみねはあやふしなど右近にかたら
ひてわらひ給いとあひきやうつきおかしきけさへそひ給へりいまはおほやけに
つかへいそかしき御ありさまにもあらぬ御身にて世中のとやかにおほさるゝま
ゝにたゝはかなき御たはふれ事をの給おかしく人の心をみ給あまりにかゝるふ
る人をさへそたはふれ給かのたつねいてたりけむやなにさまの人そたうときす
きやうさかたらひてきたるかゝひ給へはあなみくるしやはかなくきえ給
にしゆふかほの露の御ゆかりをなむみ給へつきたりしときこゆけにあはれなり
ける事かなとしころはいづくにかとの給へはありのまゝにはきこえにくゝてあ
やしき山さどになむ昔人もかたへはかはらて侍ければそのよの物かたりしゐて
侍てたへかたく思給へりしなときこえゐたりよし心しり給はぬ御あたりにとか

くしきこえ給へはうへあなわつらはしねふたきに聞いるへくもあらぬ物をとて
御そてして御みゝふたき給つかたちなどはかのむかしの夕顔とおとらしやなど
の給へはかならずさしもいかてかものし給はんと思給へりしをこよなうこそお
ひまさりてみえ給しかときこゆれはおかしの事やたれはかりとおほゆこの君と
ゝのた給へはいかてかさまてはときこゆれはしたりかほにこそ思へけれ我にに
たらはしもうしろやすしかしとおやめきての給かくきゝそめてのちはめしはな
ちつゝさらはかの人このわたりにわたいたてまつらんとしころものゝついてこ
とにくちおしうまとはしつる事を思いてつるにいとうれしく聞いてなからいま
ゝておほづかなきもかひなきことになむちゝおとゝにはなにかしられんいとあ
またもてさをはかるめるかかすならていまはしめたちましららんか中／＼なる
事こそあらめわれはかうさう／＼しきにおほえぬ所よりたつねいたしたるとも
いはんかしすきものとの心つくさするくさはひにていといったうもてなさむな
とかたらひ給へはかつ／＼いとうれしく思つゝたゝ御心になむおとゝにしらせ
たてまつらむともたれかはつたへほのめかし給はむいたつらにすきものし給し
かはりにはともかくもひきたすけさせ給はむ事こそは罪かろませ給はめときこ
ゆいたうもかこちなすかなとほゝゑみながら涙くみ給へりあはれにはかなかり
ける契となむとしころ思わたるかくてつとへるかた／＼のなにかのおり的心
さはかり思とゝむる人なかりしをいのちななくてわか心なかさをもみ侍るた
くひおほかめる中にいふかひなくて右近はかりをかたみにみるはくちおしくな
む思ひわするゝときなきにさてもものし給はゝいとこそほいかなう心ちすへけれ
とて御せうそこたてまつれ給かの末摘花のいふかひなかりしをおほしいつれは
さやうにしつみておひいてたらむ人のありさまうしろめたくてまつふみのけし
きゆかしくおほさるゝなりけりものまめやかにあるへかしくかき給てはしにか
くきこゆるを

しらすともたつねてしらむしまえにおふるみくりのすちはたえしをとな
むありける御文みつかからまかてゝの給さまなときこゆ御さうそく人／＼のれう
なとさま／＼ありうへにもかたらひきこえ給へるなるへしみくしけとのなどに
もまうけのものめしあつめて色あひしさまなどことなるをとえらせ給へればる
中ひたるめともにはましてめつらしきまてなむ思けるさうしみはたゝかことは
かりにてもまことのおやの御けはひならはこそうれしからめいかてかしらぬ人
の御あたりにはましらばむとおもむけてくるしけにおほしたれとあるへきさま
を右近きこえしらせ人／＼もをのつからさて人たち給ひなはおとゝの君もたつ

ねしりきこえ給なむおやこの御ちきりはたえてやまぬものなり右近かかすにも侍らすいかてか御らむしつけられむと思給えしたに仏かみの御みちひき侍らさりけりやましてたれもくたいらかにたにおはしまさはとみなきこえなくさむまつ御返をとせてかゝせたてまつるいとこよなくゑ中ひたらむものをとはつかしくおほいたりからのかみのいとかうはしきをとりにてゝかゝせたてまつるかすならぬみくりやなにのすちなれはうきにしもかくねをとゝめけむとのみほのかなりてはゝかなたちよろほはしけれとあてはかにてくちおしからねは御心おちゑにけりすみ給へき御かた御らむするにみなみのまちはいたつらなるたいともなしいきをひことにすみゝち給へはけせうに人しけくもあるへし中宮おはしますまちはかやうの人もすみぬへくのとやかなれとさてさふらふ人のつらにや聞なさむとおほしてすこしむもれたれとうしとらのまちのにしたいふとのにてあるをことかたへうつしてとおほすあひすみにもしのひやかに心よくものし給御方なれはうちかたらひてもありなむとおほしをきつうへにもいまそかのありし昔のよの物かたりきこえいて給けるかく御心にこめ給事ありけるをうらみきこえ給ふわりなしや世にある人のうへとてやとはすかたりはきこえいてむかゝるついでにへたてぬこそは人にはことには思きこゆれとていとあはれけにおほしいたり人のうへにてもあまたみしにと思はぬ中も女といふ物の心ふかきをあまたみ聞しかはさらにすきくしき心はつかはしとなむ思しををのつからざるましきをもあまたみし中にあはれとひたふるにらふたきかたはまたたくひなくなむ思いてらるゝよにあらましかはきたのまちにものする人のなみにはなとかみさらまし人のありさまとりくになむありけるかとかとしうおかしきすちなとはをくれたりしかともあてはかにらうたくもありしかななどの給さりとあかしのなみにはたちならへ給はさらましの給なをきたのおとゝをはめさましと心をき給へりひめ君のいとうつくしけにてなに心もなく聞給からうたければまたことはりそかしとおほしかへさるかくいふは九月の事なりけりわたり給はむ事すかくしくもいかてかはあらむよろしきわらはわ人なともとめさすつくしにてはくちおしからぬ人くも京よりちりほひきたるなどをたよりにつけてよひあつめなとしてさふらはせしも俄にまとひいて給しさはきにみなをくらしければまた人もなし京はをのつからひろき所なれはいちめなとやうのものいともくもとめつゝいてくその人の御子なとはしらせさりけり右近かかとの五条にまつしのひてわたしたてまつりて人々えりとゝのへさうそくとゝのへなとして十月にそわたり給おとゝひむかしの御かたにきこえ

つけたてまつり給あはれと思し人のものうしゝてはかなき山さとかくれぬにけるををさなき人のありしかはとしころも人しれすたつね侍しかともえきゝいてゝなむをうなになるまですきにけるをおほえぬかたよりなむきゝつけたるにたにとてうつろはし侍なりとてはゝもなくなりにつけり中将をきこえつけたるにあしくやはあるおなしことうしろみ給へ山かつめきておひいてたればひなひたることおほからむさるへくことにふれてをしへ給へといとこまやかにきこえ給けにかゝる人のおはしけるをしりきこえさりけるよ姫君のひとつころものし給かさうくしきによき事かなとおひらかにの給かのおやなりし人は心なむありかたきまでよかりし御心もうしろやすく思きこゆれはなどの給つきくしくうしろむ人などともことおほからてつれくしに侍るをうれしかるへき事になむの給殿のうちの人は御むすめとしらてなに人またゝつねいて給へるならむむつかしきふる物あつかひかなといひけり御車三はかりして人のすかたともなと右近あれば中ひすしたてたりとのよりそあやなにくれとたてまつれ給へるそのよやかておとゝのきみわたり給へり昔ひかる源氏などいふ御なは聞わたりたてまつりしかとしころのうゑくしさにさしも思きこえさりけるをほのかなるおほとなふらにみきちやうのほころひよりはつかにみたてまつるいとゝおそろしくさへそおほゆるやわたり給かたのとを右近かいはなてはこのとくちにいうへき人は心ことにこそとわらひ給いてひさしなるをましにひける給てひこそいとけさうひたる心ちすれおやのかほはゆかしきものとこそきけさもおほさぬかとしてき丁すこしをしやり給わりなくはつかしければそはみておはするやうたいなといとめやすくみゆれはうれしくていますこしひかりみせむやあまり心にくしとの給へは右近かゝけてすこしすおもなの人やとすこしわらひ給けにとおほゆる御まみのはつかしけさなりいさゝかもこと人とへたてあるさまにもの給なさすいみしくおやめきてとしころ御ゆくゑをしらて心にかけぬひまなくなけき侍をかうてみたてまつるにつけても夢の心ちしてすきにしかたの事ともとりそへしのひかたきにえなむきこえられさりけるとて御めをしのこひ給まことにななうおほしいてゐる御としのほとかそへ給ておやこのなかのかく年へたるたくひあらし物を契つらくもありけるかないまはものうゑくしくわかひ給へき御ほにもあらしをしとしころの御物かたりなきこえまほしきになとかおほつかなくはとうらみ給にきこえむ事もなくはつかしければあしたゝすしつみそめ侍にけるのち何事もあるかなきかなむとほのかにきこえ給こゑそ昔人にとよくおほえてわかひたりけるほゝゑみてしつみ給けるをあはれともいまは

またたれかとはて心はへいふかひなくはあらぬ御いらへとおほす右近にあるへき事の給はせてわたり給ぬめやすく物し給をうれしくおほしてうへにもかたりきこえ給さる山かつの中にとしへたれはいかにいとをしけならんとあなつりしをかへりてこゝろはつかしきまてなむみゆるかゝるものありといかて人にしらせて兵部卿宮などのこのまかきのうちこのましうし給心みたりにしかなすきものともいとうるはしたちてのみこのわたりにみゆるもかゝるもののくさわひのなきほとなりいたうもてなしてしかな猶うちあはぬ人の気色みあつめむとの給へはあやしの人のおやゝまつ人の心はけまさむ事をさきにおほすよけしからすとの給まことに君をこそいまの心ならましかはさやうにもてなしてみつへかりけいとむしんにしなしてしわさそかしとてわらひ給におもてあかみておはするいとわかくおかしけなりすゝりひきよせ給うててならひに

こひわたる身はそれなれと玉かつらいかなるすちをたつねきつらむあはれ

とやかてひとりこち給へはけにふかくおほしける人のなこりなめりとみ給中將の君にもかゝる人をたつねいてたるをようゐしてむつひとふらへとの給ければこなたにまうて給て人かすならすともかゝるものさふらふとまつめしやすへくなむ侍ける御わたりのほにもまいりつかふまつらさりけることゝいとまめ

くしうきこえ給へはかたはらいたきまて心しれる人は思ふ心のかきりつくしたりし御すまゐなりしかとあさましうゐ中ひたりしもたとしへなくそ思くらへらるるや御しつらひよりはしめいまめかしうけたかくておやはらからとむつひきこえ給御さまかたちよりはしめ目もあやにおほゆるにいまそ三条も大弐をあなつらはしく思ひけるましてけむかいきさしけはひおもひいつるもゆゝしき事かきりなしふんこのすけの心はへをありかたきものに君もおほしゝり右近も思いふおほそうなるは事もをこたりぬへしとてこなたのけいしともさためあるへきことゝもをきてさせ給ふんこのすけもなりぬ年比ゐ中ひしつみたりし心ちに俄になこりもなくいかてかかりにてもたちいてみるへきよすかなくおほえしおほ殿のうちをあさゆふにいて入ならし人をしたかへ事をこなふ身となれはいみしきめいほくと思けりおとゝの君の御心をきてのこまかにありかたうおはします事いとかたしけなしとしのくれに御しつらひのこと人々の御しやうそくなとやむ事なき御つらにおほしをきてたるかゝりともゐ中ひたることやと山かつのかたにあなつりをしはかりきこえ給てゝうしたるもたてまつり給ふついてにをり物とものわれもくゝと手をつくしてをりつゝもてまいれるほそなかこうちきの色くさまくゝなるを御覧するにいとおほかりける物ともかなかたくゝにう

らやみなくこそ物すへかりけれとうへに聞え給へはみくしけ殿につかうまつれるも此方にせさせ給へるもみなとうてさせ給へりかゝるすちはたいとすくれて世になき色あひにほひを染つけ給へはありかたしと思ひ聞え給ふこゝかしこのうち殿よりまいらせたるうち物とも御覽しくらへてこきあかきなどさま／＼をえらせ給つゝ御そひつころもはことにも入させ給ふておとなひたるしやうらうともさふらひてこれはかれはとりくしつゝ入うへもみ給ていつれもおとりまさるけちめもみえぬ物ともなめるをき給はん人の御かたちに思よそへつゝたてまつれ給へかしきたる物のさまにゝぬはひか／＼しくもありかしとの給へはおとゝうちわらひてつれなくて人の御かたちをしはからむの御心なめりなさてはいつれをとかおほすときこえ給へはそれもかゝみにてはいかてかとさすかはちらひておはすこうはいのいともむうきたるゑひ染の御こうちきいまやう色のいとすくれたるとはかの御れうさくらのほそなかにつやゝかなるかいねりとりそへてはひめ君の御れうなりあさはなたのかいふのをり物をりさまなめきたれとにほひやかならぬにいとこきかいねりくして夏の御かたにくもりなくあかきにやまふきの花のほそなかはかのにしのたいにたてまつれ給をうへはみぬやうにておほしあはすうちのおとゝのはなやかにあなきよけとはみえなからなまめかしうみえたるかたのましらぬににたるなめりとけにをしはからるゝをいろにしたいし給はねと殿みやり給へるにたゝならすいてこのかたちのよそへは人はらたちぬへき事なりよきとても物ゝ色はかきりあり人のかたちはをくれたるも又なをそこひある物をとてかのすゑつむはなの御れうにやなきのをり物のよしあるからくさをみたれをれるもいとなまめきたれは人しれすほゝゑまれ給むめのおりえたてうとりとひちかひからめいたるしろきこうちきにこきかつやゝかなるかさねてあかしの御かたに思やりけたかきをうへはめさましとみ給うつせみのあま君にあをにひのをりものいと心はせあるをみつつけ給て御れうにあるくちなしの御そゆるし色なるそへ給ておなし曰き給へき御せうそこきこえめくらし給けににいたるみむの御心なりけりみな御返ともたゝならす御つかひのろく心／＼なるにすゑつむひむかしの院におはすれはいますこしさしはなれえんなるへきをうるはしくものし給人にてあるへき事はたかへ給はす山ふきのうちきの袖くちいたくすゝけたるをうつほにてうかけ給へり御ふみにはいとかうはしきみちのくにかみのすこしとしへあつきかきはみたるにいてや給へるは中／＼にこそ

きてみればうらみられけりからころもかへしやりてん袖をぬらして御ての

すちことにあふよりにたりいたくほゝゑみ給てとみにもうちをき給はねは
うへ何事ならむとみおこせ給へり御つかひにかつけたる物をいとわひしくかた
はらいたしとおほして御気色あしければすへりまかてぬいみしくをのをはさ
ゝめきわらひけりかやうにわりなうふるめかしうかたはらいたき所のつき給へ
るさかしらにもてわつらひぬへうおほすはつかしきまなりこたいのうたよみ
はからころもたとぬるゝかことこそはなれねまろもそのつらそかしさらに
ひとすちにまつはれていまめきたることの葉にゆるき給はぬこそねたきことは
はたあれ人のなかなる事をおりふしおまへなどのわざとあるうたよみの中に
はまとひはなれぬみもしそかしむかしのけさうのおかしきいとみにはあた人と
いふいつもしをやすめところのうちをきてことの葉のつゝきたよりある心ちす
へかめりなとわらひ給よろつのさうしうた枕よくあなひしりみつくしてそのう
ちのこと葉をとりいつるにのみつきたるすちこそつようはかはらさるへけれひ
たちのみこのかきをき給へりけるかうやかみのさうしをこそみよとておこせた
りしかわかすいなういとところせうやまひさるへき所おほかりしかはもとよ
りをくれたるかたのいとゝなかゝうこきすへくもみえさりしかはむつかしく
てかへしてきよくあなひしり給へる人のくちつきにてはめなれてこそあれとて
おかしくおほいたるさまそいとをしきやうへいとまめやかにてなとてかへし給
けむかきとゝめてひめ君にもみせたてまつり給へかりける物をこゝにもものゝ
なかなりしもむしみなそなひてければみぬ人はた心ことにこそはとをかりけ
れとの給ひめ君の御かくもんにいとようなからんすへて女はたてゝこのめる事
まうけてしみぬるはさまよからぬことなり何事もいとつきなからむはくちおし
からむたゝこゝろのすちをたゝよはしからすもてしつめをきてなたらかならむ
のみなむめやすかるへかりけるなどの給て返しはおほしもかけねはかへしやり
てむとあめるにこれよりをし返し給はさらむもひかゝしからむとそゝのかし
きこえ給なさけすてぬ御心にてかき給いと心やすけなり
かへさむといふにつけてもかたしきのよるの衣をおもひこそやれことはり
なりやとそあめる